

1 卑弥呼の「銅鏡百枚」と「五尺刀二口」

「奥野正男著作集I」梓書院刊

1 「銅鏡百枚」

『魏志倭人伝』は、魏王朝から卑弥呼に「銅鏡百枚」を下賜するという景初二年(二三八)の詔書を載せている。また、正始元年(二四〇)の条には、

「大守の弓^{きゅう}・刀^{やいば}は梯^{いし}・櫛^しを遣^やわし、詔書・印綬^{いんじゆ}を奉^{ほう}じて倭国に詣^よる。倭国に拜^{あが}つし、并^あせて詔^{みことごと}をもたらし、金帛^{きんぱく}・錦^{きん}・刀^{やいば}・鏡^{かみ}・采^{さい}物を賜^{たま}う。倭国は使^{つか}いに因^よりて上^あ表^{ひょう}し、詔^{みことごと}恩^{おん}に答^{こた}へす」

とあるから、これらの品物が、この年、卑弥呼の手に入ったことはまちがいない。

考古学上の問題としては、この鏡が日本の遺跡から出土するどの種の鏡かということである。

九州北部の弥生後期の墳墓から出土する後漢式鏡がそれにあたる——というのが私の主張である。後漢式鏡とは、中国では、王莽^{おうもう}・後漢代に入ってから、それまでの前漢鏡と異なる新しい鏡式が出現し、後漢・三国・晋代にわたって紋様の退化・簡略化を示しながら継続している。その鏡名としては、内行花文鏡(図32)・方格規矩鏡(図33)・獸首鏡・夔鳳鏡^{きぼう}・盤竜鏡・鳥文鏡・双頭竜鳳文鏡・位^い至^し三公鏡・画文帯神獸鏡などがある。これらの鏡は、

卑弥呼が使を出した洛陽や華北の魏晋代の墳墓から出土している。

一方、日本の考古学界では、四世紀以後の日本の古墳から出土する三角縁神獸鏡(図34)を卑弥呼の入手した鏡とする説が、戦前以来主張されてきている。この種の鏡は近畿地方の四世紀以後の古墳から多く出土するため、邪馬台国畿内論者の多くがこの説を支持してきた。

しかし、この鏡は、邪馬台国の時代とされる弥生時代後期の遺跡からは一枚も発見されていない。また、これは魏鏡とされているにもかかわらず、中国や朝鮮から一枚も発見されていない鏡なのである。

しかも、この鏡の文様のなかには「傘松形」紋様と日本の鏡研究者が名付けた、特異な紋様が描かれており、中国のあらゆる時代のすべての鏡種のなかにも、このような鏡の紋様は見つかっていないのである。三角縁神獸鏡が中国の魏代の鏡であるなら、すくなくとも魏代とそれ以前の鏡の紋様のなかに、この「傘松形」紋様があらわれているはずで、それがまったく見当たらないのである。私は、三角縁神獸鏡の「傘松形」紋様が、すべての中国鏡にみられないのは、この鏡が卑弥呼の入手した鏡ではなく、中国鏡をモデルにして日本で作られた証拠である、と主張してきた。



図 34 獸文帯三神三獸鏡
(大分宇佐赤塚古墳出土)



図 33 方格規炬神鏡
(脊振村横田出土)

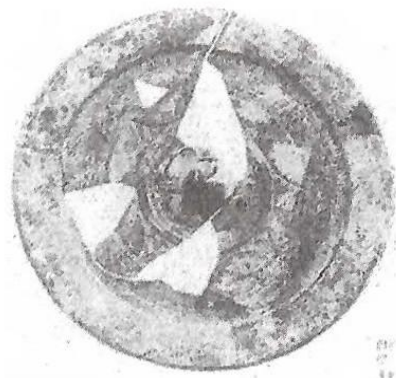


図 32 内行花文鏡
(上峰村・一本谷出土)

これに対して、邪馬台国を近畿と考える考古学者で、とくに鏡を研究している学者・研究者の多くは、「特鑄鏡」という戦前からの考えを現在も支持している。特鑄というのは、倭国向けにだけこの鏡を造ったのだという。だから中国に出土しない、というわけである。

また、弥生時代の遺跡から一枚もこの鏡が出土しないことについても、「伝世鏡」という戦前からの考えをもちだしている。

伝世鏡というのは、三角縁神獸鏡は卑弥呼の生きていたとき邪馬台国に入っていたが、すぐ墳墓

に副葬品として入れられず、百年、二百年と地上で保管（伝世）され、その必要がなくなつたとき副葬品として古墳に納められた、というものだ。

「特鑄鏡」とか「伝世鏡」などという考えは、考古学の方法で証明された事実ではもちろんない。日本向けの特製品など、見てきたような推測だが、古代の中国で、特定の国や地域に特製品を出していた事実もない。

伝世品は、中国にあるが、日本の弥生時代の事例では、鏡の「伝世」を否定する事実が増加しており、最近では「景初四年」などという中国に実在しない年号をもつ三角縁盤竜鏡も見つかり、特鑄説・伝世説は大きくゆらいでいる。

2 筑紫平野の後漢式鏡

邪馬台国近畿説は、卑弥呼の「銅鏡百枚」について、中国で一枚も出土していない古墳出土の三角縁神獸鏡をそれだという。

しかし、邪馬台国への賜物として二・三世紀代の洛陽で調達できる鏡をもとめるとしたら、それはまずなによりも、同じ時期に洛陽や華北で出土し、その存在が考古学的に証明されているものでなくてはならないだろう。

表1 弥生時代青銅鏡府県別出土数

	中国鏡		国産鏡		合計
	前漢	後漢	大形	小形	
福岡	103	126	5	38	272
佐賀	10	32		20	62
大分	2	21		4	27
熊本		6		11	17
長崎	3	4		21	28
鹿児島		1		3	4
	190 (82.6%)				410 (81.5%)
山口	1	1		5	7
島根				2	2
鳥取		1		2	3
広島		2		1	3
岡山	2	3		7	12
					27 (5.4%)
愛媛		5		4	9
香川		2		2	4
徳島		3			3
高知		2			2
					18 (3.6%)
兵庫		7		4	11
大阪		4		7	11
京都		4			4
奈良			1	3	4
和歌山		2		1	3
	17 (7.4%)				33 (6.5%)
岐阜		1			1
滋賀				1	1
石川		2		4	6
富山				2	2
福井		1			1
愛知				1	1
神奈川				1	1
東京				1	1
群馬				1	1
					15 (2.9%)
計	121	230	6	146	503
	351		152		

前節で列記した後漢式鏡は、その条件を充分みだして
いるだけではなく、同時代の弥生後期の遺跡からすでに
二〇〇枚以上、出土している鏡なのである。その分布を
見てみよう。

弥生時代の中国鏡と国産鏡の総出土数は五〇三面
(一九八八年八月現在)で、そのうち前漢鏡一二一、後漢
鏡二三〇、国産鏡一五二、合計五〇三面に達する。

地域別にみると、九州四一〇(八一・五パーセント)、中
国二七(五・四パーセント)、四国一八(三・六パーセント)、

近畿三三(六・五パーセント)、近畿以東一五(二・九パーセ
ント)となり、九州が大半を占める。とくに九州北部の
福岡二七二(五四・二パーセント)、佐賀六二(一二・三パー
セント)に集中している(図35)。この事実からみて、中
国鏡は弥生時代をつうじて、九州北部に分布の中心があ
ることは明白であろう。

つぎに邪馬台国の時代の二・三世紀、つまり弥生時代
後期に入った後漢式鏡の分布をみよう。

後漢式鏡の総出土数は二三〇面で、地域別にみると九

州一九〇（八二・六パーセント）。中国七（三パーセント）、四国一二（五・二パーセント）、近畿一七（七・四パーセント）、近畿以東四（一・七パーセント）となっている。弥生後期の後漢式鏡の場合も、福岡一二六（五四・八パーセント）、佐賀三二（二三・九パーセント）、大分二一（九・一パーセント）と九州北部に集中している（図36）。

有明海沿岸、筑紫平野の中国鏡の分布は、弥生時代後期に入ってから後漢式鏡の出土がすでに四〇面に達している。とくに吉野ヶ里遺跡をふくむ神埼郡内に集中しており、この地域に邪馬台国時代の有力首長、王などがいたことを裏付けている（図37）。

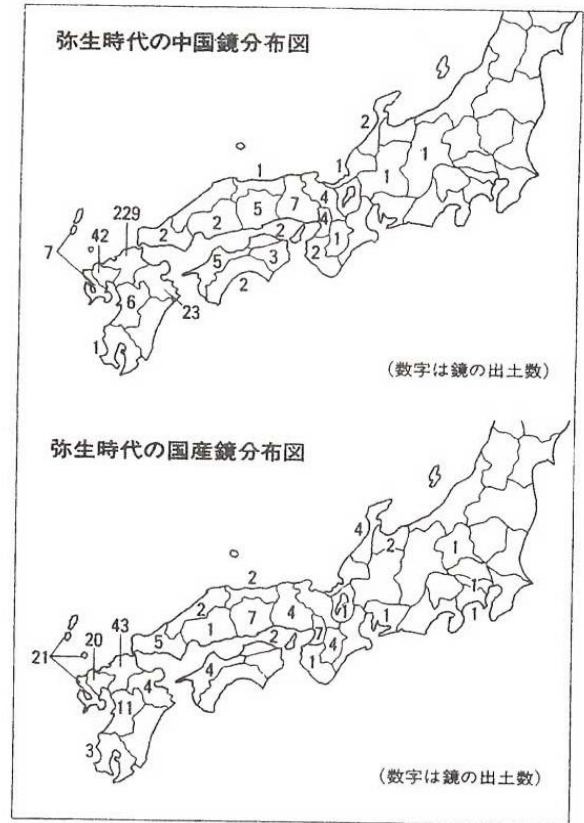


図35 中国鏡と国産鏡の分布



図36 弥生時代後期の後漢式鏡分布図

鏡を副葬していた神埼郡の主な墳墓
 三津永田遺跡（神埼郡東脊振村、弥生後期中ごろ、甕棺墓から細線式獣帯鏡一・四蛇鏡一・昭明鏡一）
 三津永田北方遺跡（同、内行花文鏡一）
 松葉遺跡（同、箱式石棺墓から方格規矩四神鏡一）

大曲切通遺跡（同、土壙墓から内行花文鏡一）
 大曲切通北方遺跡（同、箱式石棺墓から昭明鏡一）
 横田遺跡（同、箱式石棺墓から方格規矩四神鏡一）
 二塚山遺跡（同、中期後半～後期中ごろの甕棺墓、土壙墓から清白鏡一・昭明鏡一・細線式獣帯鏡一・内行花文鏡一）
 三角遺跡（神埼郡神埼町、後期前半の甕棺墓から四蛇鏡一）
 上志波屋遺跡（同、箱式石棺墓から昭明鏡一）
 寺ヶ里遺跡（同、箱式石棺墓から方格四乳鏡一）
 北外遺跡（同、箱式石棺墓から内行花文鏡一・方格規矩渦文鏡一）
 文鏡一）
 柴尾橋下流遺跡（神埼郡千代田町、後期末の溝から内行花文鏡一）

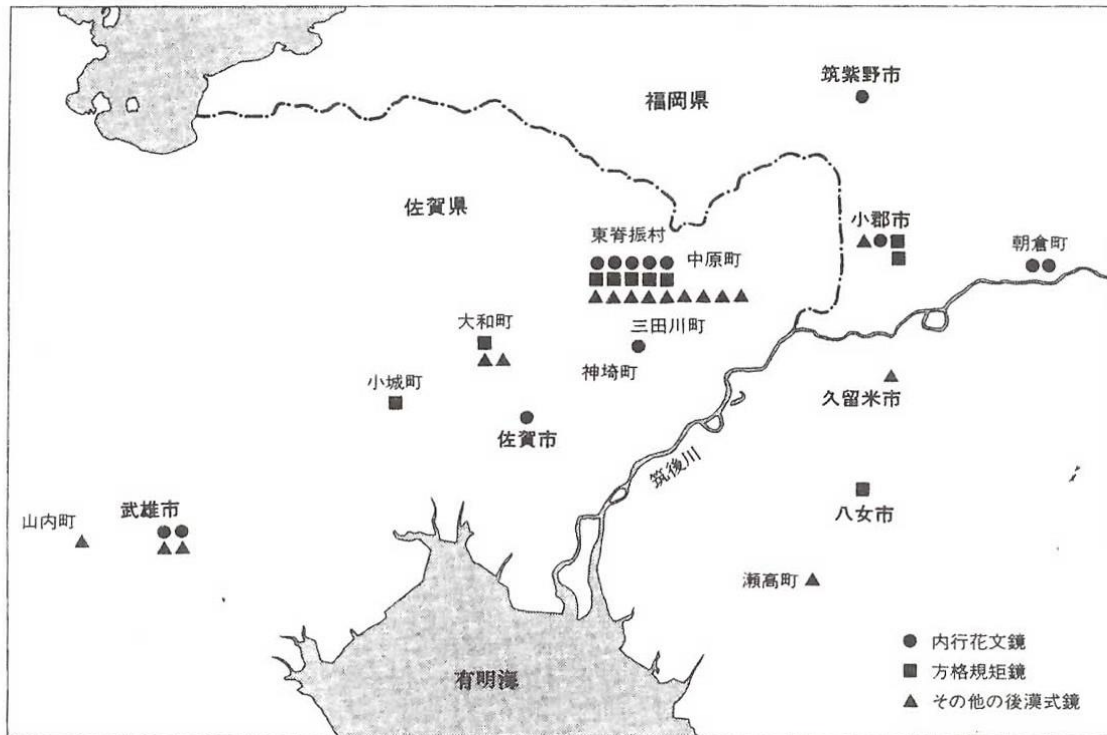


図 37 筑紫平野の後漢式鏡の分布

惣座遺跡（佐賀郡大和町、後期後半の溝から鏡片一）
池ノ上遺跡（同、方格規矩鏡一）
十三塚遺跡（同、方格規矩鳥文鏡一、夔鳳鏡一）

3 「五尺刀」と鉄製武器

柄に環をつけた鉄刀で、文字どおり魏尺で五尺といえ
ば一・二メートル前後になる。弥生時代には一メートル
を超える刀はきわめて少なく、一応二五センチ以上を
大刀、二五センチ未満を刀子として分けた場合、大刀
二九、刀子二一、不明一で、合計五一の出土例がある
（一九八八年八月現在）。地域別の出土数は、九州・山口
の出土数が四九例（九六パーセント）にのぼる。

府県別では福岡三二、佐賀七、山口七、熊本二、他に
長崎・大阪・福井各一となっている。

佐賀平野東部では、三津永田遺跡一、横田遺跡一、二
塚山遺跡二など、吉野ヶ里遺跡の周辺に四口集中し、後
漢鏡がともなっているのが注目される。

このほか『魏志倭人伝』には兵（武器）として「矛・楯・
木弓・鉄鏃」の記載がある。弥生後期の実用の矛はすだ
に青銅製から鉄製に変わっており、このほか鉄剣、鉄戈
なども用いられていた。

鉄矛の総出土数は一六本で、すべて九州北部から出て
いる。楯は、木製・皮製などが考えられているが、楯の
飾金具とみられる巴形銅器の鋳型が吉野ヶ里遺跡で初め

て出土した。弥生時代の巴型銅器は、弥生後期の一一遺跡から二五点出土している。九州一三、香川八、広島・滋賀・大阪・長野が各一点となっている。九州北部の佐賀県唐津市桜馬場遺跡、福岡県糸島郡前原町井原鎚溝遺跡（後漢鏡二〇面以上）などでは後期初頭の甕棺墓の副葬品として各三個出土している。井原鎚溝のものは大きさも近く、吉野ヶ里遺跡で造られた可能性がある。

木弓は弥生前期から各地で出土例があり『魏志倭人伝』に記されたとおり「下を短く上を長く」している。鏃やじりは弥生時代後期に、ある程度、鉄鏃が普及していたとはいえ、全国各地で鉄鏃が用いられていたとは考えがたい。鉄鏃の総出土数は、約七八〇点あり、このうち九州・山口だけで約六〇〇点（約七七パーセント）を占める。

鉄剣の総出土数は一三九点で、九州一〇四（七四・八パーセント）、うち筑紫平野二五（一八パーセント）、近畿九（六・五パーセント）となっており、実用武器のなかでもっとも一般的に用いられた鉄剣が筑紫平野に多いことは注目されよう。

鉄戈は、弥生中期中ごろから後半代に用いられた大形鉄製武器であるが、総出土数は二〇点、すべて九州北部の出土である。筑紫平野から八点出土しており、長崎県大村市富ノ原の三点を加えると、過半数が有明海とその

周辺に集中している（図38）。

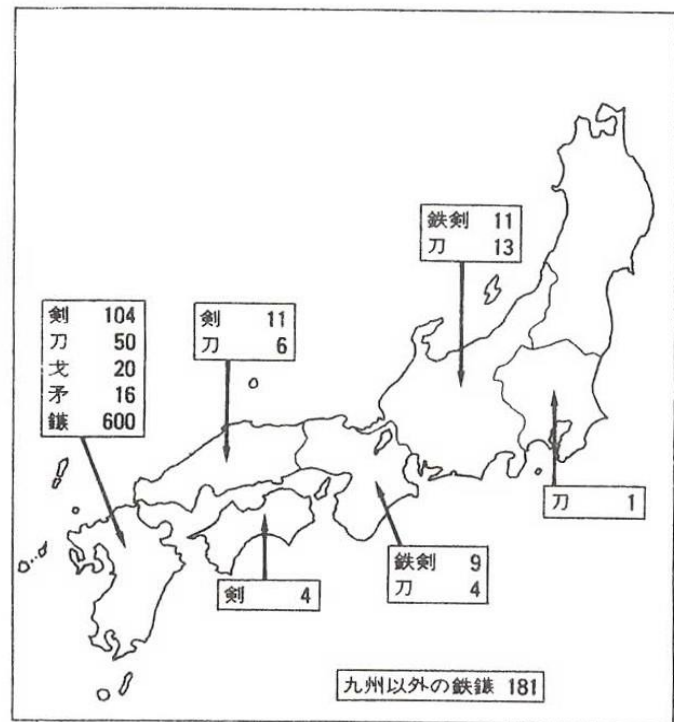


図38 弥生時代の鉄製武器出土数

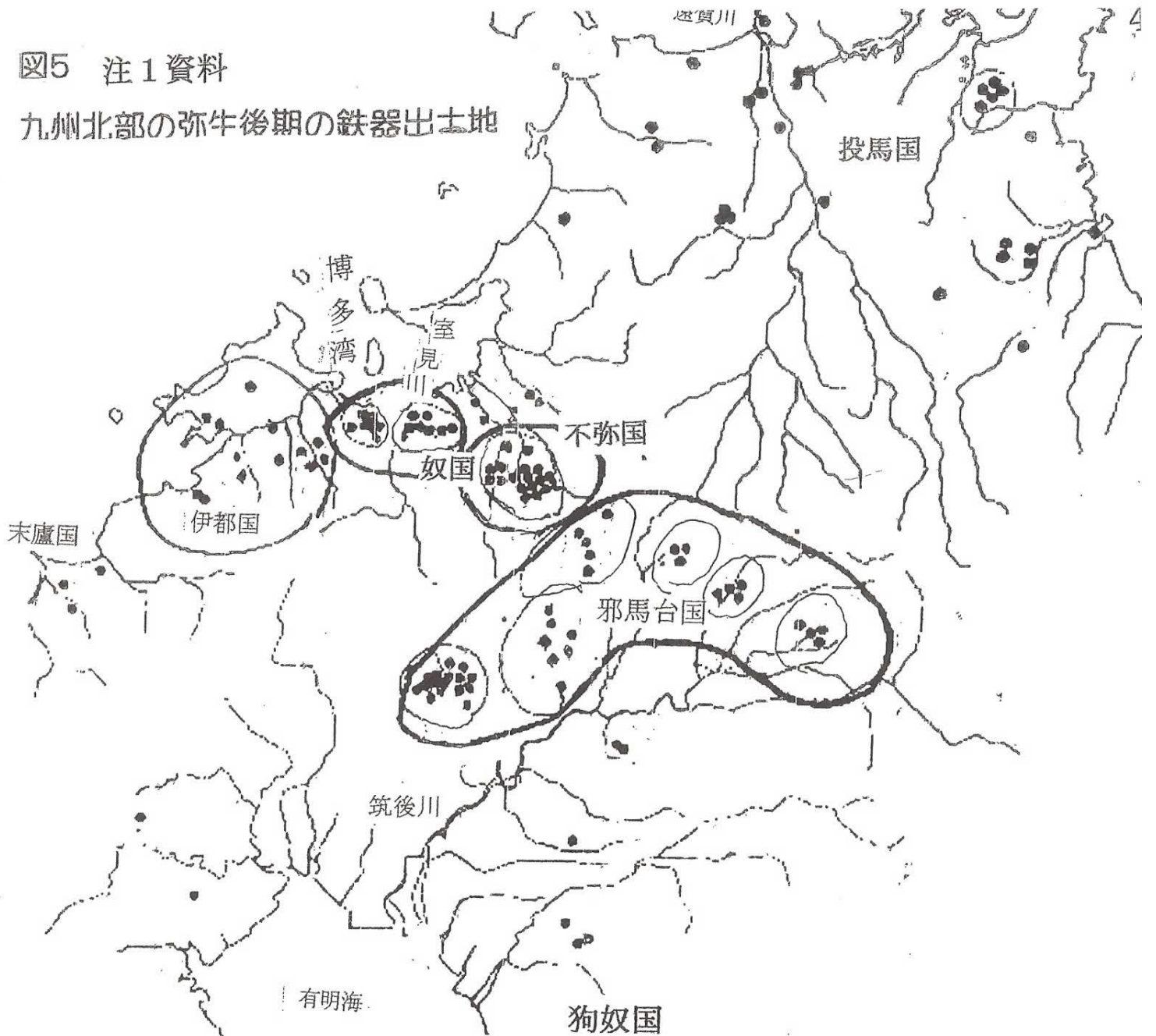
邪馬台国が今日の通説のように、弥生時代後期のクニであるとするなら、以上のべてきた鉄製武器が九州北部に集中している事実はどう理解すべきだろうか。

近畿論者はいう。鉄は腐蝕するから近畿に少ないのだ、と。また、鉄は再使用できるから、近畿では「廃品回収」がすすんでいた、だから少ないのだ、と。さらに、遺物の出土量の多さは普及を意味しない、などという考古学者もいる。

これらの意見を仮に全部認めたとしても、鉄器の出土

図5 注1資料

九州北部の弥生後期の鉄器出土地



弥生時代鉄器出土数

1981年『邪馬台国はここだ』より作成

都道府県名	鉄刀	鉄剣	鉄矛	鉄戈	鉄鏃	工具・他	合計
福岡	22	38	9	15	80	211	375
佐賀	7	7	4	2	4	22	46
長崎	3	17	3	3	15	54	95
熊本	0	1	0	0	6	212	219
大分	0	2	0	0	20	88	110
宮崎	0	2	0	0	10	4	16
鹿児島	0	9	0	0	12	6	27
山口	1	0	0	0	5	13	19
島根	0	0	0	0	0	11	11
鳥取	0	0	0	0	4	1	5
広島	0	0	0	0	1	12	13
岡山	0	0	0	0	1	19	20
徳島	0	0	0	0	0	1	1
香川	0	1	0	0	0	40	41
愛媛	0	0	0	0	3	11	14
高知	0	0	0	0	2	1	3
大阪	0	0	0	0	19	14	33
和歌山	1	1	0	0	0	0	2
奈良	0	0	0	0	0	1	1
合計	34	78	16	20	182	721	1051

注1資料

図4 注1資料

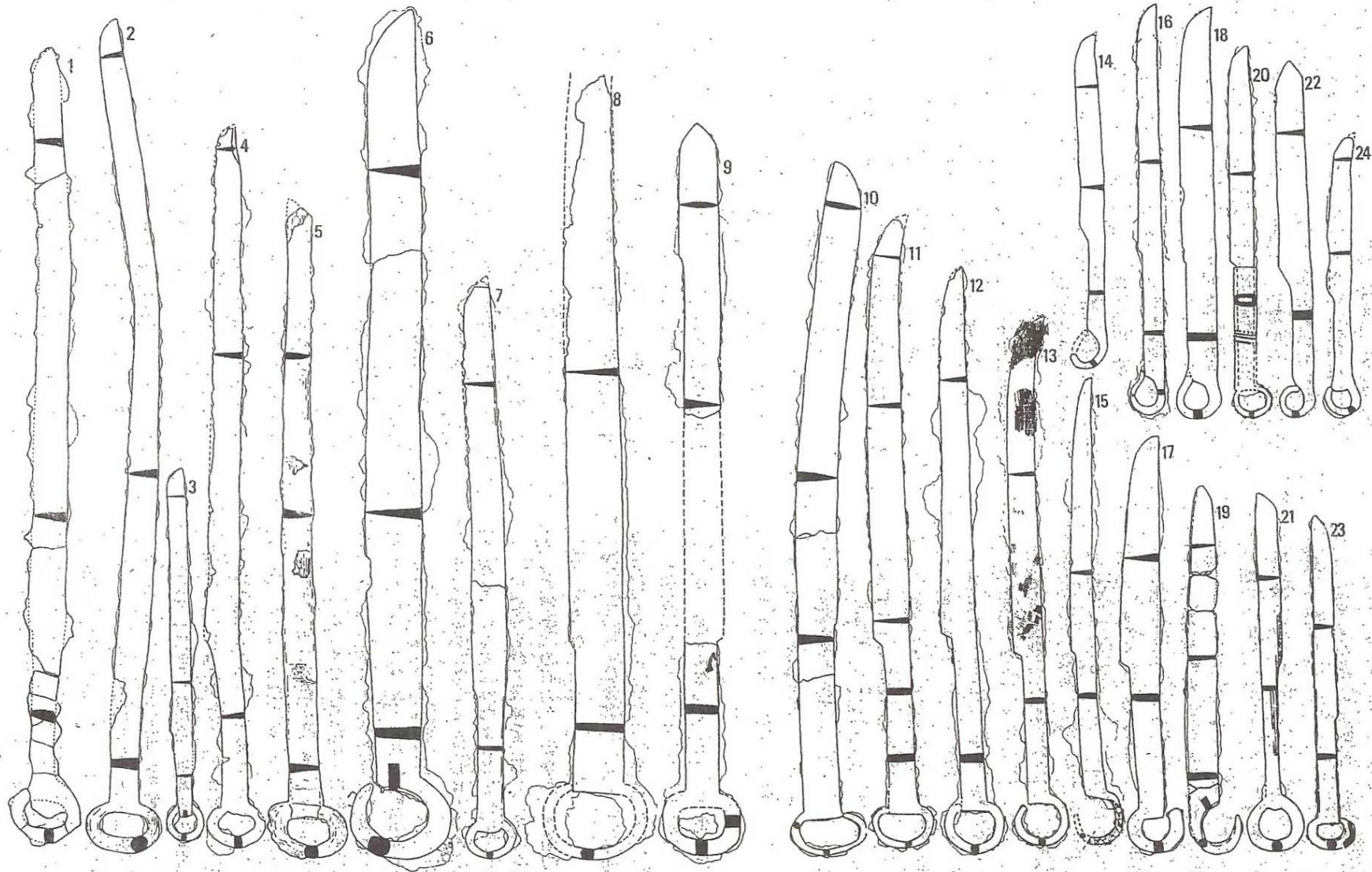


図22. 弥生時代（一部、古墳時代前期例を含む）の素環頭鉄刀

- | | | |
|---------------------|---------------------|------------------|
| 1. 長崎トウトゴ山1号箱式石棺墓 | 2. 佐賀横田遺跡 | 3. 福岡藤崎6号方形周溝墓 |
| 4. 福岡丸尾台遺跡 | 7. 佐賀二塚山52号土城墓 | 8. 福岡郷屋遺跡 |
| 11. 福岡前田山5号石蓋土城墓 | 12. 福岡沙井掛A地区167号木棺墓 | 13. 福岡前田山9号箱式石棺墓 |
| 16. 福岡沙井掛A地区189号木棺墓 | 17. 福岡上り立遺跡 | 18. 山口朝田13号箱式石棺墓 |
| 21. 福岡立岩23号甕棺墓 | 22. 山口朝田13号箱式石棺墓 | 23. 佐賀桃島山遺跡 |

(番号は長～短・縮尺不同) 大半の図は注12児玉真一氏報文から引用

- | | |
|-------------------|---------------------|
| 4. 佐賀二塚山36号土城墓 | 5. 佐賀三津永田104号甕棺墓 |
| 9. 福岡須川山田遺跡 | 10. 福岡沙井掛A地区109号木棺墓 |
| 14. 山口朝田4号箱式石棺墓 | 15. 福岡松本遺跡 |
| 19. 福岡宝満尾13号石蓋土城墓 | 20. 福岡沙井掛A地区184号木棺墓 |
| 24. 山口朝田1号箱式石棺墓 | |

前原市上町向原箱式石棺出土 (5尺刀)



注1資料

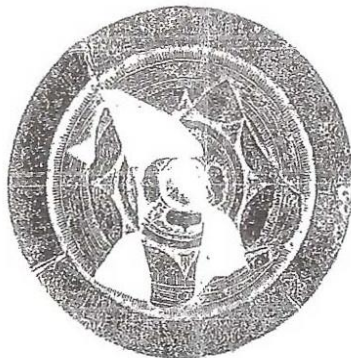
表1 弥生終末～古墳初頭期の後漢鏡出土数

奈良 漢 墓	地方 鏡式名	長 崎 熊 本	佐 賀	福 岡	大 分	熊 本	山 口	中 国 山 陰	四 国	近 畿	東 海 東	合 計
	(多鈕細文鏡)	1	4	3			1			2	1	12
II	異体字銘帯鏡		5	1	2		1	2				11
	子龍文鏡		2	1				1				4
III	方格規矩鏡	3	4	4	6	7		1	1	3	2	67
	内行花文鏡		3			6	1	2				
IV	内行花文鏡		3	2	5					9	1	50
	青龍三年銘鏡									1		1
	細線式獸帯鏡								1			1
	半肉彫獸帯鏡			4	2			1			2	9
V	盤龍鏡	1		1		1						3
	双頭龍文鏡			2								2
	キ鳳鏡	1		2							1	4
	飛禽文鏡	1	2	4	2	1		1	2			13
	斜縁二神二獸鏡								1		1	2
	環状乳神獸鏡			2								2
	同向式神獸鏡				1				1	2		4
	画像鏡			1	1							2
	位至三公鏡									1		1
	鏡式不明		1	4	3						2	10
	(平原大型鏡)			5								5
	(小形仿製鏡)	1		1	3					2		7
	後漢鏡合計	7	20	99	27	2	2	8	4	20	9	198

(最終加筆 2010年6月10日)



石動四本松遺跡



坊所一本谷遺跡



二塚山遺跡



三津永田遺跡

図3 吉野ヶ里遺跡周辺から出土した漢式鏡

注1資料



平原遺跡の内行花文鏡 (径46, 5cm国宝)



上志波屋遺跡



松葉遺跡



横田遺跡